

# J. S. バッハ 《マタイ受難曲》 BWV244

—マルティン・ルターの〈サクラメント〉—

池島 与是夫  
日本大学大学院総合社会情報研究科

## J. S. Bach Matthäus-Passion BWV244

—The Sacrament of Martin Luther—

IKEJIMA Yozefu  
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

In this paper, We have verified the relationship between the Sacrament of Martin Luther and Johann Sebastian Bach's Matthäus-Passion BWV244 (1727) and we, further, have clarified the main factor between Paul's mystērion (mysterium Christi) and Aurelius-Hippo-Augustinus' sacramentum (sacrum signum).

---

### 1. はじめに

本論文のねらいは、J. S. バッハ (Johann Sebastian Bach, 1685-1750) のライプツィヒ時代 (1723~50 年) の大作《マタイ受難曲 Matthäus-Passion》BWV244 (1727 年) 創作に大きな影響を与えた、マルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) の神学、特に「サクラメント神学」の観点に焦点をあてて、そこからバッハ教会音楽の「本質」に迫ることにある。また、本稿では、従来のバッハ研究から論じられることがなかった、バッハの《マタイ受難曲》の神学的・信仰的意義という新しい側面から論じることを目的としている。なぜなら、《マタイ受難曲》にはサクラメントと同じ働きをするサクラメント的もしくは、パウロ・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) のいう「サクラメンタル象徴」(芸術的・宗教的シンボル) という外的な「しるし」があり、それが現れていると捉えているからである。また、本稿ではルターの「サクラメント」(聖礼典) を論じるにあたり、初めに、バッハの《マタイ受難曲》を簡単に紹介し、次に「サクラメント」とは何かという視点からパウロ (Paulos) の「秘義」(キリストの秘義) とアウグスティヌス (Aurelius-Hippo-Augustinus, 354-430) の「サクラメント」(聖なる徴し) を取り上げ、論じる

ものである。

### 2. バッハの《マタイ受難曲》とサクラメント 2.1 バッハの《マタイ受難曲》BWV244 (1727)

ルター派の信者であるバッハは、生まれるとすぐに洗礼を受けている。その後、成長したバッハは本格的に音楽の素養を身に着けると、ミュールハウゼン時代 (1707~08) では教会カンタータ創作を開始する。ワイマール時代 (1703, 1708~1716)、ケーテン時代 (1717~1723) と続き、バッハは新天地を求めてライプツィヒに家族と共にやってくる。バッハはトーマス・カントルとして数多くのカンタータを創作する。そして、ライプツィヒ時代 (1723~50 年) の大作の一つ《マタイ受難曲》BWV244 (1727/4/11-1736 後期稿) を創作するが、それはカンタータ創作の音楽技法を駆使したもので、ある意味、教会カンタータの「拡大バージョン」ともいえるべき作品である。《マタイ受難曲》を簡単に要約すると次のようになる。

1) 音楽のテーマは、イエス・キリストの受難と十字架上の死を扱い、それは、ルターの「十字架の神学」の教えを継承するもの。2) 台本はマタイ福音書 (第 26 章-第 27 章 66 節) を中心に、歌詞は、ピカンダー-Picander (本名: ヘンリーツィ Christian Friedrich

Henrici, 1700-64) によるマドリガル自由詩となっている。3) 初演は、ライプツィヒの聖トーマス教会、聖金曜日の晩課礼拝（午後の礼拝）で上演されている。なお、バッハは午前の主要礼拝では聖餐（二種陪餐）を受けている。4) 楽曲構成：「第1部」、第1曲～第29曲—「説教」—「第2部」第30曲～第68曲（演奏時間：約3時間）/合唱+アリア+レチタティーヴォ+二重唱+コラール（讚美歌）、5) 編成：「第1グループ」：合唱、ソプラノ（独唱、女中I・II、ピラトの妻）、アルト（独唱）、テノール（福音史家、独唱）、バス（イエス、独唱、ユダ、祭司I・II、ペトロ、カイアファ、ピラト）/フルート、オーボエ、リコーダー、ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバ、通奏低音、オルガン/「第2グループ」：合唱、ソプラノ（独唱）、アルト（独唱、証人I）、テノール（独唱、証人II）、バス（独唱）/フルート、オーボエ、リコーダー、ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバ、通奏低音、オルガン（チェンバロ）\*（四句節のためトランペットは使用せず）

今日、《マタイ受難曲》は教会の礼拝で上演されることはあまりなく、もっぱらコンサートホールで演奏されることが多い。だが、バッハの《マタイ受難曲》の音楽には、多くの人々を惹きつけ、深い感動と感銘へと我々を導くちからを秘めている。そこには、ルターの文脈からいえば、目に見えない、隠された、神からの恩恵としるし、キリスト者を識別する外的しるし、恩恵の姿が現れている。そしてバッハはキリストの肢体、手足となって《マタイ受難曲》や教会カンタータなどを創作した。それは、神の約束としるしを結びつけているものと捉えることができるのである。

## 2.2 内的、霊的な恩恵の徴し— sacrament

バッハの《マタイ受難曲》を神学的視点から論じるにあたり、ルターの sacrament やトマスの sacrament（秘跡）を比較・類比<sup>1</sup>の考察をし、さらに

<sup>1</sup> 石浜弘道は「アナロギアは〈比例〉を意味するギリシャ語 *ἀναλογία* に由来する言葉で、二つのものの「比例、調和」を意味し、類比、類推、比論などと訳される。主に二つの事物（各項 *Analogat*）が、なんらかの性質や関係を共通にもち（共通項 *Analogon*）、かつ一方の事物がある性質や関係を持つ場合に、他方の事物

その上で、ティリッヒの「 sacrament 象徴」の考察も試みるものである。

たとえば、トマスは sacrament を「内的、霊的な恩恵の徴し」と呼び、ルターは sacrament を、神からの恩恵であり、恩恵の姿、外的な「しるし」と呼んでいる。ルター派教会では「聖礼典」<sup>2</sup>と訳され、そしてローマ・カトリック教会では「秘跡」と呼ばれている「 sacrament *sacramentum, mysterium, sacrament*」とはどのようなものなのか。トマスによれば、本来、「聖礼典」、もしくは「秘跡」の原語である「*sacramentum*」というラテン語は *sacrare*（聖別する、聖化する）という動詞に由来するというのである。これは、聖別の行いを執行する者をはじめ、聖別の行いそのもの、性別された人や物などを示し、聖別のために用いられる方法を表す言葉であった。また、ローマの兵士が軍に対して行う忠誠の誓いも神々の前で行われることから *sacramentum* と呼ばれ、さらに、訴訟に関する意味合いもあり、訴訟の間、神殿に納める金銭も *sacramentum* と表現された<sup>3</sup>。

そして、ギリシャ語の「*μυστήριον mysterion*」の訳語として教会用語に導入されてからも、テルトゥリアヌス(Tertullianus, 160頃-220以降)においては、

もそれと同じ関係や性質を持つであろうと推論すること (Analogie) である。」と述べている (石浜弘道『カント宗教思想の研究 神とアナロギア』北樹出版、2002年、11頁)。

<sup>2</sup> 「聖礼典 ( sacrament )」：宗教改革者たちは、 sacrament のアウグスティヌスの定義を受けとめつつ、カトリックの sacrament 理解を批判した。その批判は、次の3点にまとめることができる。1) 第一に sacrament は厳密にキリスト自身によって制定されたものに限定する。したがって、洗礼と聖餐の二つのみである (洗礼はマタイ福音書 28 : 19-20 の復活のキリストによる宣教・洗礼命令、また聖餐はIコリント 11 : 23-25 のキリストの聖餐設定辞に基づく)。2) 第二点は、 sacrament における受領者の信仰の強調、つまり *ex opera operato* 批判である。3) 第三に、神の恵みの手段としての sacrament のみならず、説教を重視するという点である (『ルターと宗教改革事典』日本ルーテル神学大学・ルター研究所編、教文館、1995年、127～129頁)。

<sup>3</sup> トマス・アクイナス『神学大全 第3部 秘跡論—総論 (第60-65問題)』稲垣良典訳、創文社、2002年、177頁。

神の礼拝における犠牲、象徴、動作、信仰の教えと神秘、神による秘めた計画などを示す言葉として使用された<sup>4</sup>。そして、その他の教父たちでは、なおも軍隊的な意味が含まれていたようである<sup>5</sup>。

東方ギリシャ教会では、ギリシャ語の *mysterion* という言葉は、聖なる教えと役務、教会での聖なる事物と祭儀を意味していた。したがって、「 sacramentum」をも表す言葉として引き続いて使用されていた。また、西方ラテン教会でも sacramentum を示すのに、二つのラテン語 *sacramentum* と *mysterium* が使用され、 sacramentum に含まれる二つの側面、すなわち、神の秘められた、そして今や啓示された働き、および神に対する我々人間の礼拝と奉仕という二つの側面が適切に示されたのである。これら二つのラテン語 *sacramentum* と *mysterium* が、歴史的に、 sacramentum として交互に用いられたことは、祭儀 *ritus* としての sacramentum が信仰の神秘と密接に結びついていることを如実に物語っている<sup>6</sup>。そのことから、 sacramentum という言葉には、隠れた神秘を示す感覚的な「徴し」を意味するものとなり、その「徴し」は言葉を含めた可視的で、すなわち目に見える形で具体的な質料を示すものへと展開しているのである。

### 3. パウロとアウグスティヌス

#### 3.1 パウロの秘義（キリストの秘義）

ルターの sacramentum 論を展開する前に、予備的な考察として、神学的な概念としての sacramentum の歴史を簡単に触れなければならない。そして、ルター<sup>7</sup>の「聖礼典」という sacramentum 神学を正しく理解するためには、使徒パウロとアウグスティヌス、

sacramentum 論を避けて通ることはできないであろう。なぜなら、トマス・アクイナス (Thomas Aquinas, c1225-74) やルターの sacramentum 論はパウロから影響を受けていたと理解できるからである。

パウロにとって、本来 sacramentum は、根本的にキリストの秘義 (*mysterium Christi*) を意味するもので、秘義とは「キリストによる」神の大いなる啓示を指し示すものである<sup>8</sup>。これは、永遠の沈黙のうちに隠れていた神、「近づくことのできない光のうちに住み、人間がだれも見なかったことのない、見ることもできない」(1テモテ 6・16) 神、その神が肉のうちに自分に啓示された。それがパウロのいう秘義である。そして、その子イエスである御言葉 (ロゴス) が人間となり、十字架の上で父なる神の完全な愛を、人間には理解できない方法で示された。それは、「わたしたちがまだ罪びとであったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことによって、神はわたしたちに対するご自分の愛を明らかにされました」(ローマ 5・8) ということに他ならないのである<sup>9</sup>。また、ヨハネはパウロと同じことを、「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる神、ひとり子こそ、神をあらわしたのである。」(ヨハネ 1・18) と他の言葉で述べている。したがって、我々は人となり、十字架につけられた神の子イエス・キリストのうちに、神の秘義を見るのである。その秘義は、永遠から隠されていたが、今やキリストによって教会 (エクレシア) に知らされ、啓示されたのである (エフェソ 3・9 参照)。言い換えるならば、キリストその人が秘義そのものということである。なぜなら、キリストは目に見えない神性を肉のうちに啓示したからである。すなわち、キリスト自らがへりくだって行ったさまざまな行為、特に、十字架上での受難はまさに秘義そのものである<sup>10</sup>。

また、稲垣 (2002) によれば、使徒パウロの「ローマ人への手紙」(第 6 章第 3-5 節) の一節、「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、

<sup>4</sup> トマス・アクイナス『神学大全 第3部 秘跡論—総論 (第 60-65 問題)』稲垣良典訳、創文社、2002 年、177 頁。

<sup>5</sup> 『宗教改革著作集 14 信仰告白・信仰問答』徳善義和・石引正志・出村彰・森井真他訳、教文館、1994 年、575 頁。

<sup>6</sup> トマス・アクイナス、前掲訳書、177 頁。

<sup>7</sup> ルターはトマス・アクイナスの神学があらゆる異端や誤りの源泉だとしたが、トマス的な神学をどこまで正しく理解して批判していたかは、議論の分かれるところでもある (『ルターと宗教改革事典』日本ルーテル神学大学・ルター研究所編、1995 年、286 頁)。

<sup>8</sup> オード・カーゼル『秘儀と秘義』小柳義夫訳、みすず書房、1975 年、22 頁。

<sup>9</sup> 前掲訳書、22 頁。

<sup>10</sup> 前掲訳書、22~23 頁。

またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかる者となりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう<sup>11</sup>」をその根拠に挙げている。

### 3.2 アウグスティヌスの秘跡（聖なる徴し）

パウロの神秘主義<sup>12</sup>もしくは秘義<sup>13</sup>を正しく継承したのは、アウグスティヌス<sup>14</sup>である。彼は、西方ラテン教会において sacrament 神学の形成に最大の役割を果たしたといっても過言ではない。トマスの sacrament 神学はアウグスティヌスの sacrament

<sup>11</sup> トマス・アクイナス『神学大全 第3部 秘跡論—総論（第60-65問題）』稲垣良典訳、創文社、2002年、148頁。

<sup>12</sup> 「パウロの神秘主義」：信仰におけるキリスト体験にある。パウロの場合、イエスの死と、イエスの生を生きるという体験であり、聖霊によってキリストと（同じ像に化）せられることであった。パウロは、「われキリストとともに十字架につけられたり、もはやわれ生くるにらず、キリストわが内にありて生くるなり。」と述べている（『宗教学辞典』小口偉一・堀一郎監修、東京大学出版会、1974年、440頁）。

<sup>13</sup> 土屋吉正は、「秘義(mysterium)の意味は中世になって特殊化した意味、すなわち人間の理性のみでは完全に理解できない、啓示による真理ということだけを意味するのではなく、神の救いの計画がキリストの救いのわざによって現され、成就され、現実のものとなったことを意味している。そしてこの秘義の中心である新約のパスカを過越秘義(mysterium paschale)と呼んで、秘跡である教会がちょうどキリストの十字架上の死去から復活への移りによって生まれたことを示している。」と説明している（土屋吉正『典礼の刷新—教会とともに二十年』オリエンツ宗教研究所、1990年、81頁）。

<sup>14</sup> 稲垣は「より根源的には意味でトマスがアウグスティヌスの伝統の継承者であることを見落としてはならない。トマスは個々の学説に関してはアウグスティニアンではなかった—むしろ彼はフランシスコ会員と論争したが、真理探究の基本的態度においては真のアウグスティニアンであった、とすることができる。」と述べている。これはトマスがアウグスティヌスの圧倒的影響を受けながらも、アウグスティヌスを批判的に継承していることである（稲垣良典『トマス・アクイナス』講談社学術文庫、60～61頁）。

ント神学に関するテキスト、つまり、基本的な内容のものをより詳しく厳密に考察を試み、そして、それを神学的言語によって表そうとしたことである。ただ、稲垣によれば、それは「必ずしも一義的な厳密さではなく、むしろ sacrament という言葉が類比的 analogie<sup>15</sup>用いられることを視野に入れた上での厳密さ<sup>16</sup>」ということである。トマスは、厳密に言えば、過越の小羊の生け贄を旧い教会法の sacrament と呼んだが、それは新しい教会法の sacrament とは違った意味で sacrament であることを認めていたようである<sup>17</sup>。

アウグスティヌスの sacrament 神学の核心部分といえるのは、彼が『キリストの教え』において「それが感覚に印刻するところの形象を超えて、何か別のものを認識するに到らしめるところのもの」と定義している「徴し」 signum であり、そして、この概念を用いて sacrament は「目に見える犠牲は目に見えない犠牲の徴し、すなわち聖なる徴し sacrum signum<sup>18</sup>」と規定していることである。

そして、これが「洗礼」の場合、アウグスティヌスは「目に見え、耳に聞こえるのは水と唱えられる一定の言葉であるが、言葉が自然の要素（水）と合体する<sup>19</sup>」とき、「目に見えない霊的ないし神的な実

<sup>15</sup> 「アナログア」：四項間に成り立つ比例の関係（A : B = C : D）を表わす数学的な用語としての「アナログアとは割合の等しさである（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1131a31）といわれる。後にトマス・アクイナスが『存在者と本質』をはじめとする諸著作において発展させたアナログア・エンティス（存在の類比）の思想は、アリストテレスが「存在は多様な意味で語られる」（『形而上学』1028a10）と述べて存在概念の一義性を否定した箇所解釈と密接な関わりを有する。アリストテレスは存在概念の多様性を説明するに際して、「健康な」といわれる動物を第一の項として、動物の健康をもたらす薬やその健康のしるしである尿といった他の項もまた、動物との関係において等しく「健康な」と称されるという古典的な例（同、1003a33）をあげている（『岩波 哲学・思想事典』廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄他編、岩波書店、1998年、26頁）。

<sup>16</sup> トマス・アクイナス、前掲訳書、79頁。

<sup>17</sup> 前掲訳書、179頁。

<sup>18</sup> 前掲訳書、179頁。

<sup>19</sup> 前掲訳書、179頁。

存の徴しである「目に見えるものとなった言葉 *visibile verbum*」ともいえる sacrament が成立する<sup>20</sup>」と述べている。

アウグスティヌスの sacrament は、稲垣 (2002) によると、「基本的に徴しであるが、たとえば、火の徴しである煙が火の原因ではなくむしろ結果であるように、通常は、徴しは結果であって原因ではないのにたいして、秘跡はそれが徴しとして表示する恩寵を生ぜしめるちからをふくんでおり、その意味で徴しであると同時に原因である<sup>21</sup>」ということで、このちからはキリストないし聖霊<sup>22</sup>に由来するものと付け加えている。したがって、sacrament の効果は sacrament を授与、執行する者ないし受ける者の個人としての信仰や倫理的な資質に依存するのではなく、sacrament そのものに含まれる霊的なちから、すなわち、キリストないし聖霊に由来するものに依存することである<sup>23</sup>。また、アウグスティヌスは、たとえば、悪の振る舞いを行う人間によって sacrament 自体が損傷を受けたりすることはなく、そして、弱められることがないことも一貫して述べている。これは、後に、トマスがアウグスティヌスの sacrament の「事効性」*ex opere operato*<sup>24</sup>、ならびに「道具的原因」*causa instrumentalis*<sup>25</sup>として

<sup>20</sup> トマス・アクイナス『神学大全 第3部 秘跡論—総論 (第60-65問題)』稲垣良典訳、創文社、2002年、179頁。

<sup>21</sup> 前掲訳書、180頁。

<sup>22</sup> 「聖霊」：アウグスティヌスにとって「*spiritus* (霊)」は聖霊であり、この霊をキリストから受ける者は、それによって単なる自然的な生命ではない、超自然的な永遠の生命にあずかることになる。それが「霊的な生」*vita spiritualis* にほかならない (津崎幸子『トマス・アクイナスの言語哲学』創文社、1997年、154頁参照)。

<sup>23</sup> 前掲訳書、180頁。

<sup>24</sup> 「事効性」：稲垣による訳語。便宜的に「事効性」という訳語を用いたが、原語は「為された業からして」という副詞句。秘跡はたんに神の恩寵あるいは聖性の徴しであるにとどまらず、むしろ恩寵を与え、聖化する原因ことを強調する定式 (稲垣良典『トマス・アクイナスの神学』創文社、2013年、用語解説 20~21頁)。

<sup>25</sup> 「道具的原因」：秘跡はたんにそれを通じて恩寵が与えられる徴し *signum* にとどまるのではなく、現実的に恩寵を与える原因であることの説明として、秘跡を通じてわれわれに恩寵が与えられるさいに、恩寵を生ぜ

の sacrament に関する理論として仕上げられる sacrament 神学的一端が、アウグスティヌスの中に見いだされものと判断できるのである<sup>26</sup>。

さらに、アウグスティヌスが強調していることは、sacrament において主要な働きを行うのはキリストないし聖霊であり、それは、すべての sacrament の創出者と制定者 *auctor-institutor* はキリストであることを終始一貫として主張しているのである<sup>27</sup>。したがって、この地上における sacrament の授与する者ないし執行する者は、あくまでも副次的な役割を果たすのにすぎない、ともアウグスティヌスは述べている。そして何よりも稲垣によれば、「彼は『詩篇講解』のなかで繰り返し、眠りにおちたアダムのわき腹からエバが出現したように、十字架の上で死の眠りを眠り給うキリストのわき腹から教会とすべての sacrament が流れ出た<sup>28</sup>」とアウグスティヌスの言葉を引用している。

#### 4. ルターの sacrament (聖礼典)

##### 4.1 神の「しるし」<sup>29</sup>であり、恩恵の「しるし」

宗教改革の基本的信仰告白ともいえる『アウグスブルク信仰告白』(1530年)は、ルターの側近・右腕とも称される、フィリップ・メランヒトン (Phlipp Melanchthon, 1497-1560) によって起草され、まとめられている。その『アウグスブルク信仰告白』には「信仰と教えの条項」(第13条 聖礼典の使い方について) という項目があり、聖礼典 (sacrament) について簡潔、かつ具体的に、次のように記載されている。

聖礼典の使い方についてはこう教えられている。  
すなわち、聖礼典が定められているのは、人が外

しめる主要な能動的原因は神あるいは (人となられた神である) キリストであり、秘跡は主要な能動的原因によって動かされる限りにおいて恩寵を生ぜしめる道具的原因である、と言われる (稲垣良典、前掲書、28~29頁)。

<sup>26</sup> トマス・アクイナス、前掲訳書、180頁。

<sup>27</sup> 前掲訳書、180頁。

<sup>28</sup> 前掲訳書、180頁。

<sup>29</sup> 本項目では、ルター派の sacrament (聖礼典)、すなわち、神の内的な見えない霊的な恵みを、「しるし」と記載し、統一する。

的にキリスト者を認めることができるしるしとし  
てばかりではなく、我々の信仰をそれによって起  
こし、強めるためのしるしと証しとして、である。  
それだからこれは信仰を要求する。また、信仰に  
おいて受け取られ、それによって信仰が強められ  
るとき、それは正しく用いられているのである<sup>30</sup>。  
(下線は筆者)

これはルター派の信仰告白であると同時に、ルターが宗教改革の際に、一貫して主張してきた、初代教会以来の正統的で伝統的な信仰に立ちながら、イエス・キリストに於ける神の救いを、歴史的に記述するという手法が取られている<sup>31</sup>。そして、 sacrament (聖礼典) をキリスト者の外的な「しるし」と明確に認め、信仰をさらに強めるための「しるし」と、条項のなかにおいて明らかにしている。したがって、ルターのいう sacrament とは、キリスト者を識別する外的な「しるし」であり、われわれに対する神のみ旨の「しるし」を意味し<sup>32</sup>、同時にそれは神からの恩恵を証明するものでもある。そして、ルターは、 sacrament の「しるし」をキリストとその救いの聖なる出来事に根拠を求めたのである。すなわち、 sacrament とされるには、神の約束としるしを持っているどうかを聖書によって検討しなければならぬものである<sup>33</sup>。そして、ルターによれば、約束がしるしに結びつけられているものが本格的 sacrament と呼ばれるもので、しるしに結びつけられない他のものは、単なる約束に過ぎない。したがって、厳密にいうことを望むのであれば、それは、教会の中には洗礼と聖餐 (パン) の二つの神の sacrament があるだけ、ということである<sup>34</sup>。

また、ルターは恩恵の「しるし」を、恩恵の姿と表現している。ルターによれば、恩恵の姿というのは、「十字架上のキリストと、キリストのすべての聖

徒たちにほかならない<sup>35</sup>」ということである。すなわち、恩恵のしるしというのは、十字架上のキリストがわれわれの罪を取り去り、それをわれわれに代わってキリスト自身が担ってくれた、ということである。

さらに、石居 (2005) によると、 sacrament の使用についても言及し、それは、メランヒトンはルターにならい、アウグスブルク信仰告白弁証の中でも、広い意味の解釈において sacrament と呼ばれるのに差支えないものと思われるものに、みことば<sup>36</sup>をはじめ、祈り、福音的に理解された教職の按手などについても挙げている<sup>37</sup>。その上で、石居 (2005) は「もちろん宗教改革の教会において、本来の sacrament として受け取られたのは、新しい契約のしるしであり、恵みと罪の赦しである洗礼と聖餐であった。そしてメランヒトンは神のご命令と約束とがある事柄が保たれさえしたら、聡明な人は決して数とか呼び名とかについてはあまり争わないであろう、と述べている<sup>38</sup>」と、当時のカトリック教会と sacrament 理解の違いを明らかにしている。

また、ヴァイタ (Vilmos Vajta, 1969) も「具体的にいえば、われわれが、 sacrament を正しく用いることができるのは、信仰によるのである。そして、信仰なしに sacrament を受けることは、 sacrament を冒瀆することになる。 sacrament は、信仰を媒介にして有効となる。すなわち、設定のことばのなかで約束されているように、罪のゆるしを与え

<sup>35</sup> 『ルター著作集 第1集第1巻』石本岩根・長谷川健三郎・徳善義和・緒方純雄他訳、聖文舎、1964年、587頁。

<sup>36</sup> 「みことば」：ヴァイタによれば、「ルターの神学において信仰を特色づけるものは、他の何ものよりもみことばをきくことである。きくことは、恵みをうけようとして自分を身構える人間のわざではなく、全く受け身の姿勢である。それは、単純に神の声によって語りかけられ、とらえられることである。」ということである (Vajta, Vilmos. *Die Theologie Des Gottesdienstes bei Luther 3. Auflage*. Göttingen-Vandenhoeck und Ruprecht, 1959, S. 240-241. /邦訳『ルターの礼拝の神学』聖文舎、1969年、196~197頁)。

<sup>37</sup> 石居正巳、前掲書、98頁。

<sup>38</sup> 前掲書、98頁。

<sup>30</sup> 『宗教改革著作集 第14巻』徳善義和他・石引正志・出村彰・森井真訳、教文館、1994年、41頁。

<sup>31</sup> 前掲書、625頁。

<sup>32</sup> 石居正巳『教会とはだれか ルターにおける教会』リトン、2005年、98頁。

<sup>33</sup> 前掲書、97頁。

<sup>34</sup> 前掲書、98~99頁。

る<sup>39</sup>」と述べている。それは、信仰において sacrament を用いることは、神のみわざを快く受け取ることであり、キリストの中へ受け入れられることを意味するのである。

ただ、ルターの初期の著作の段階、『教会のバビロン捕囚について』（1520年）の中では、sacrament は三つのしるしとして、ルターは洗礼、ごんげ<sup>40</sup>、聖餐を挙げ、この時点では、まだ、カトリックの sacrament 論の影響を窺わせるものであった<sup>41</sup>。先に、トマスの秘跡論でも見てきたように、カトリック教会では、教会自体が広い意味において sacrament（秘跡）であると捉えていたし、キリストの存在そのものにも、神と人間との関係を見出そうとしていた。その一方で、カトリックの主張する七つの sacrament<sup>42</sup>は、すべてが同等のものとして扱っているわけではない。これに関して、石居（2005）は「ことに直接 sacrament の関係でいわれているのではないが、諸真理の間の秩序あるいは順位を認めるということが、今日のローマ教会が他教会に開かれた態度を取っている基盤である」と述べ、その

<sup>39</sup> Vajta, Vilmos. *Die Theologie Des Gottesdienstes bei Luther 3. Auflage*. Göttingen-Vandenhoeck und Ruprecht, 1959, S. 245-246. (邦訳『ルターの礼拝の神学』聖文舎、1969年、198頁)。

<sup>40</sup> 石居は「ごんげ（懺悔）」と呼び表し、ルターは、sacrament を正しく用いるために、正される悪習として、カトリック教会の一種陪餐、司祭の独身、ミサ、懺悔告白、食物の区別、修道誓願、司教権の問題を論じている（『ルターと宗教改革事典』日本ルーテル神学大学・ルター研究所編、教文館、1995年、22頁）。他方、カトリック教会及びトマスは「悔悛」*poenitentia* と表現している。悔悛は罪人の内的な悔い改めであると同時に、罪の告白 *confessio* である。罪すなわち神への背き、神からの離反に代わる神への回心 *conversio*、神との和解 *reconciliatio*、神の赦し *indulgentia*、さらに罪の償いの業を意味することもある（稲垣良典『トマス・アキナスの神学』創文社、2013年、18頁参照）。

<sup>41</sup> 石居正巳『教会とはだれか ルターにおける教会』リトン、2005年、98～99頁。

<sup>42</sup> 「七つの sacrament」：洗礼・堅信・ゆるし・聖餐（聖体）・叙階・婚姻・癒しの7秘跡が、第2リヨン公会議（1274）の信仰宣言の中で確立されて以来、今日にいたるまで執行されている（『岩波 キリスト教辞典』大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編、岩波書店、2002年、430頁）。

上で、たとえば、洗礼と聖餐を sacrament とすることに、プロテスタント教会とカトリック教会の間に違いがないことを明らかにしている<sup>43</sup>。

ルターは、実際に sacrament をどのように理解し、捉えていたのだろうか。まず初めに、ルターの『死への準備についての説教』（*Eyn Sermon von der Bereytung zum Sterbenn*. 1519, WA 2, 685-697）の中から sacrament について、彼はどのように言及しているのか。また、sacrament の効力、すなわち、sacrament は何の役に立ち、何のために用いているのかも、少し詳しく見ていきたい。ルターは sacrament を信じることの必要性を次のように述べている。

心から sacrament に頼り、sacrament を信じるならば、当然神を愛し、たたえ、感謝し、そして喜んで死ぬことのできる大きな理由を持っているのである。なぜなら、sacrament において司祭をとおして行為し、あなたと語り、あなたに働きかけるのは、あなたの神なるキリストご自身であり、そこでなされ、語られることは人間のわざやことばではないからである<sup>44</sup>。

また、ルターは sacrament の「しるし」とはどのようなものであるかを、次のように簡潔に述べている。

キリストの生命があなたの死を、キリストの従順があなたの罪を、キリストの愛があなたの陰府を自ら背負うて、これを克服したこととしるし、その保証となそうとしたのである。（中略）いわば、神の《愛の》みこころの・目に見えるしるしである<sup>45</sup>。

<sup>43</sup> 石居正巳、前掲書、99頁。

<sup>44</sup> *D. Martin Luthers Werke. Sonderedition der Kritischen Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1883 Werke, Teil I, 1. Band, Gesamtherstellung: Ebner und Spiegel GmbH, Ulm Printed in Germany, 2003, S. 692.* (邦訳『ルター著作集 第1集 第1巻』石本岩根・長谷川健三郎・徳善義和・緒方純雄他訳、聖文舎、1964年、592頁)。

<sup>45</sup> *Ibid.*, S. 692. (前掲訳書、592頁)。

ルターは sacrament の「しるし」を神の恵みの確かな「しるし」、すなわち、神の「しるし」と呼んでいる。そして、このしるしによって、永遠の生命に救い入られる者は、すべて救い入れられる、という救いの道が開かれている。また、このしるしによって、キリストとその姿が示されて、死と罪と、陰府の形相に対抗することが可能となるのである。さらに、「キリストの生命は、私の死をご自身の死において克服し、キリストの服従は私の罪をご自身の受難において根絶し、キリストの愛は私の陰府をご自身が見捨てられたことにおいて破壊された<sup>46</sup>」と、ルターは強調している。したがって、ルターの sacrament に対する理解・態度は次のように言い表される。

ここで最もたいせつなことは、神のみことばと約束としるしそのものがあらわれるところである。聖なる sacrament を、私たちが重んじ、敬い、信頼すること、すなわち、sacrament を疑わず、また sacrament がその確かなしるしとなっている<sup>47</sup>。

ルターによれば、sacrament を敬うということは、それは、sacrament が意味すること、神がその中で語り約束した一切のことが真実であり、自分の身に実現するというのを信じて、神の母マリアとともにゆるぎない信仰をもって、「あなたのみことばとしるしどおり、この身に成りますように」（ルカ 1・38）と言い切ることに他ならない<sup>48</sup>。そして、もし sacrament そのものを疑うのであれば、一切は無駄になってしまう。なぜなら、キリストが述べているように、私たちが信じる通りに、私たちになる

からである、とルターは、その理由および sacrament の必要性を明らかにしている<sup>49</sup>。また、ルターは「それゆえに、sacrament は軽々しく考えられるべきものではない。そこには、sacrament を信頼し、このような神のしるしと神の約束とに、喜んで身を投げ込むだけの信仰がなければならない<sup>50</sup>」と「信仰」を強調する形で述べ、それに加えて、ルターはこの神のしるしを信じることにより、われわれは価値ある者となり、そして、恩恵の状態が続くことによって、sacrament の効力、つまり、有効性を結論付けている<sup>51</sup>。したがって、このように見えてくると、ルターにとって、sacrament は必要なものであり、それには、信仰が不可欠であると判断しているのである。

#### 4.2 「聖餐」の sacrament :

ルターの聖餐に関していえば、たとえば、カトリックはミサが中心的な sacrament であった。だが、ルターが問題視したのは、カトリックの聖餐が一種陪餐（パンだけの陪餐）であり、しかも実体変化（化体説）であったということである。ルターはカトリックの実体変化を犠牲理解として退けた。なぜなら、キリストのただ一度限りの十字架の犠牲が曖昧にされると感じ、また犠牲を献げることが人間の功績を積むことに繋がると危惧したからである。これに対し、ルターは聖餐の二種陪餐（パンとぶどう酒による陪餐）を掲げ、キリストの真のからだと血とが、パンとぶどう酒と共に現臨、つまり「神の現臨」があると主張したのである。これは、聖餐は神の恵みの分与であって、特定の人のために功績を積むことを意図したミサ奉獻というものを考えることができないということである。すなわち、sacrament はいわゆる事効的効力によって働くのではなく、神の約束を信じる信仰をもってあずかることが重要なのである。したがって、ルターは洗礼と聖餐以外の、神の約束の言葉に基づかないトマスおよびカトリックの sacrament を否定したのである。

ルターの聖餐論、すなわち、ルターにとって、キ

<sup>46</sup> D. Martin Luthers Werke. Sonderedition der Kritischen Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1883 Werke, Teil 1, 1. Band, Gesamtherstellung: Ebner und Spiegel GmbH, Ulm Printed in Germany, 2003, S. 692-693. (邦訳『ルター著作集 第1集第1巻』石本岩根・長谷川健三郎・徳善義和・緒方純雄他訳、聖文舎、1964年、593頁)。

<sup>47</sup> Ibid., S. 693. (前掲訳書、593～594頁)。

<sup>48</sup> Ibid., S. 686. (前掲訳書、581頁)。

<sup>49</sup> Ibid., S. 693. (前掲訳書、594頁)。

<sup>50</sup> Ibid., S. 693. (前掲訳書、594頁)。

<sup>51</sup> Ibid., S. 693. (前掲訳書、594頁)。

リストのからだおよび礼拝とはどのような関係で、どのような意味が込められていたのだろうか。ヴァイタによれば、ルターは礼拝を考えるときは、必ず、神もしくはキリストと信仰を語ることである<sup>52</sup>。言い換えるならば、「神との交わりとしての礼拝」ということである。つまり、礼拝はルターにとって、信仰によって神との間にもつ交わりということ、そして、信仰とは、人間の内なるたましいの中の一つの領域に属しているのではなく、礼拝の中で具現されるものなのである<sup>53</sup>。また、岸（1961）は聖餐に関して、ルターがカトリック教会に反対した点を、「 sacramentを知るうえに必要と思う。それは、ローマ教会が、ミサを犠牲<sup>54</sup>と考えた点である。ローマ教会が、ミサを、カルヴァリーにおけるキリストの犠牲の反復と考えたことに対して、ルターは、強硬に反対した。その理由は、キリストは、「ご自身をいけにえとしてささげて罪を取り除くために、世の終わりに、一度だけ現れたのである」（ヘブル9・26）という聖句の解釈からくるのである<sup>55</sup>」と述べている。すなわち、この聖句の意味は、「キリストのいけにえはただ一回<sup>56</sup>」ということを明白にしている。さらに、ルターが根拠とした背景には聖書の存在がある。聖書によると、二様のいけにえがあることを指摘する<sup>57</sup>。それは「贖罪のいけにえ」と「感謝のいけにえ」とである。贖罪のいけにえは、神との交わりを確保する行いであるが、しかし、これに対して、感謝のいけにえは、すでに神との交わりに入れられ

た者が、感謝と讃美とをキリストにおいて献げることである。そこには、贖罪の意味はなく、この二つが混同されたとき、そこに異教的な犠牲観が生まれた、というのがルターの判断であった<sup>58</sup>。

ルターは聖餐、つまり、キリストのからだを尊い sacrament と理解している<sup>59</sup>。具体的に、sacrament としてのキリストの聖なるからだの意義について次のように述べている。

第一、聖壇の聖なる sacrament ならびにキリストの聖なる真のからだの sacrament には、これまた、私たちが知らなければならない三つのことがある。第一のことは、sacrament またはしるしであり、第二のことは、その sacrament の意義であり、第三のことは、この両者を信じる信仰であって、この三点は、いかなる sacrament にも存在しなければならないものである。sacrament は身体的な形、または姿をもった外的可視的なものでなければならない。その意義は人間の霊において内的、霊的なものでなければならない。その信仰は、この両者をいっしょに役立て用いなければならない<sup>60</sup>。

第二、sacrament ないしは外的なしるしが、パンとぶどう酒という形や姿のもとにあることは、まさに、洗礼のしるしが水にあるのと同様であるが、しかし、人はパンとぶどう酒を飲食によって受けるものであることは、ちょうど洗礼の水を受け、その中にひたり、あるいは、水を灌いでもらうのと同じである。なぜなら、sacrament ないししるしは、それが有効となるためには、受け取

<sup>52</sup> Vajta, Vilmos. *Die Theologie Des Gottesdienstes bei Luther 3. Auflage*. Göttingen-Vandenhoeck und Ruprecht, 1959, S. 17. (邦訳『ルターの礼拝の神学』岸千年訳、聖文舎、1969年、20頁)。

<sup>53</sup> *Ibid.*, S. 17. (前掲訳書、21頁)。

<sup>54</sup> 「犠牲(いけにえ) sacrifice」: 最高の形態の神礼拝。権限を与えられた司祭が民の名において、神の最高支配権を認め、人間が全面的に神に依存することを認めて、いけにえを奉献することである(『カトリック小事典』ジョン・A・ハードン編著、A. ジンマーマン監修、浜寛五郎訳、エンデルレ書店/ヘルデル代理店、2000年、16~17頁)。

<sup>55</sup> 岸千年『ヘブル書講解におけるルターの神学思想』聖文舎、1961年、173頁。

<sup>56</sup> 前掲書、173頁。

<sup>57</sup> 前掲書、174頁。

<sup>58</sup> 岸千年、前掲書、174頁。

<sup>59</sup> 彼の『キリストの聖なる真のからだの尊い sacrament について、及び兄弟団についての説教』(Eyn Sermon von dem Hochwirdigen Sacrament, des heyligen waven Leychnams Christi. Und von den Bruderchafften. 1519, WA 2, 742-758)の中で述べている。

<sup>60</sup> *D. Martin Luthers Werke. Sonderedition der Kritischen Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Univeränderter Nachdruck der Ausgabe von 1883 Werke, Teil 1, 1. Band, Gesamtherstellung: Ebner und Spiegel GmbH, Ulm Printed in Germany, 2003, S. 742.* (邦訳『ルター著作集 第1集 第1巻』石本岩根・長谷川健三郎・徳善義和・緒方純雄他訳、聖文舎、1964年、635頁)。

られるものであり、あるいは、まずもって熱望されるものでなければならぬからである<sup>61</sup>。

また、ルターは、アウグスティヌスの言葉、「(第三)、なぜあなたは胃や歯の準備をするのか、ただ信じなさい、そうすれば、すでに sacrament にあずかったことになる」と引用し、信仰の熱望だけで十分であることを強調している<sup>62</sup>。このことに関して、ローゼ(Bernhard Lohse, 2011)は、「ルターによる制定(設定)の言葉の意義は、ルターの初期の段階から進展して、そして、いくつかからなっていた。だが、実質的に、ルターはキリストの真の教えを確立する関係で、あるいは、キリストの受難、そして契約としてのパンとぶどう酒の意義、あるいは、信仰を理解するためのキリスト現臨のしるしとして、聖餐を制定(設定)していたのである<sup>63</sup>」と述べ、ローゼは言葉を繋げ、「それと共に、手始めにルターはそれまであいまいだったキリストの聖なるからだと血の関係、つまり、罪の贖い(赦し)のために十字架上で流された、キリストの御血、その制定の言葉に取り組んだ。その言葉はキリストのからだと血の現臨の「基」(根源)としての要素となったのである<sup>64</sup>」と、 sacrament としての聖餐の意義を述べている。

そしてルターは、しばしば、ローマ書の講義において主の晩餐について話をしている。彼は主の晩餐の特質(性質)を控えめに話しながらも、聖なる献げものとして、自らの考えを維持していた。それは、現実の罪の状態を浄めることになるのである。ここに、しかも、どのようなものよりも、新しい教えの

強調があった。そして、福音書にある明白な献げもの(いけにえ)であると説いたのである。ルターは「パウロによる、わたしに与えられる献げもの(いけにえ)は福音書と神からの献げものであり、異邦人(異教徒)にも同じように与えられるものである」と述べ、それは、聖徒の交わりに必要不可欠なものであった<sup>65</sup>。

以上、上の引用文から、結論として言えることは、ルターによる聖餐もしくは聖壇の sacrament の意義は、すなわち、パンとぶどう酒(二種陪餐)という sacrament を受領することであり、それは、聖なるキリストならびにすべての「聖徒との交わり」*communio sanctorum*、および一体となることの確かなしるしを受ける、ということである<sup>66</sup>。そして、神もしくはキリストは、こうした交わりを指示するために、 sacrament のしるしを設定し、どこまでも通用することができ、その形をもって、われわれを刺激し動かして、こうした交わりをつくらせているのである<sup>67</sup>。したがって、このことにより、ルターは礼拝、つまり、聖餐式そのものが sacrament であることを明確にしている。

#### 4.3 「洗礼」の sacrament :

新約聖書には、「洗礼」について象徴的な場面が描かれている。それは、イエス・キリストが十字架上で死を迎えた後、三日後に復活した。その後、11人の弟子たちはガリラヤへ行き、イエスが指示していた山に登った。そして、イエスは弟子たちの前に姿を現し、彼らを派遣することになる。この場面を『マタイ福音書』(28・16-20)によって伝えられている。

イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる<sup>68</sup>。(下線は筆者)

<sup>61</sup> *D. Martin Luthers Werke. Sonderedition der Kritischen Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1883 Werke, Teil 1, 1. Band, Gesamtherstellung: Ebner und Spiegel GmbH, Ulm Printed in Germany, 2003, S. 742.* (邦訳『ルター著作集 第1集 第1巻』石本岩根・長谷川健三郎・徳善義和・緒方純雄他訳、聖文舎、1964年、635~636頁)。

<sup>62</sup> *Ibid.*, S. 742. (前掲訳書、636頁)。

<sup>63</sup> Lohse, Bernhard. *Martin Luther's Theology, Its Historical and Systematic Development Translated and Edited by Roy A. Harrisville.* Fortress Press Minneapolis, 2011, pp. 306-307.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p. 307.

<sup>65</sup> *Ibid.*, p. 79.

<sup>66</sup> *Ibid.*, S. 743. (前掲訳書、637頁)。

<sup>67</sup> *Ibid.*, S. 748. (前掲訳書、646頁)。

<sup>68</sup> 『聖書 新共同訳 新約聖書詩編つき』共同訳聖書

これに関連して、石居（2005）は、「弟子たちはまた（めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい）（使徒 2・38）と言って、仲間に加わる者に洗礼を授けた。それは最初から教会に加わるしるしとされた<sup>69</sup>」と述べ、ルターがそれを当然なこととして受け継いでいることを説明している。その上で、石居（2005）によると、それは、キリストを信じる信仰のみによってのみ義とされるという宗教改革の基本的な信仰理解と密接に結びついていることだと述べている<sup>70</sup>。ただ、ルター当時の洗礼理解とは、内容的に、カトリック教会の洗礼理解と違っていることに注意を要することも付け加えている。また、宗教改革における問題として、聖餐理解の違いに焦点が当てられるが、ルターはみことばと洗礼も最も重要なものとして、聖餐に与ること、当時の考えではミサを献げることは、それらよりも重要でないことを指摘しているのである<sup>71</sup>。

ルターは sacrament としての洗礼をどのように理解し、捉えていたのであろうか。彼の洗礼の sacrament 論を見ていきたい<sup>72</sup>。洗礼とはどのようなものなのかを、次のように述べている。

第一、洗礼はギリシャ語でバプティスムス (Baptismus) といい、ラテン語でメルジオ (Mersio) という。すなわち、何かを全く水に沈め、水がそれを全くおおうことである。(中略) 洗礼という語の意味から言っても、子供や洗礼を受ける者を全く水の中に沈めて洗礼し、再び引き上げるようにすべきだし、それが正しいのであろう。なぜなら、ドイツ語でも、洗礼 (tauff) という語は深い (tieffe) という語に由来しており、洗礼を受ける者

を深く水中に沈めるということであるのは、疑いのないことだからである。(中略) すなわち、洗礼は、古い人とその血肉による罪の誕生とが、神の恵みによって完全に溺死させられてしまうことを意味する。(中略) こういうわけだから、その意味を満たして、それに正しい、完全なしるしを与えるべきである<sup>73</sup>。

第二、洗礼は、まだ洗礼を受けていないすべての人々から私たちを聖別する外的なしるしであり、標識である。すなわち、そこで私たちは、私たちの君たるキリスト〔ヘブル 2・10〕の民であると認められ、その旗（すなわち、聖なる十字架）のもとで、私たちは絶えず罪に抗して戦うのである。だから、私たちはこの聖なる sacrament において、三つのこと、すなわち、しるしと意味と信仰とに注目しなければならない。しるしとは、人を父と子と聖霊との名において水の中へ突き入れることにある<sup>74</sup>。（下線は筆者）

洗礼を受け、キリストの弟子となった、すなわち、キリスト者の生涯は、ルターによれば、洗礼から死に至るまで、祝福の恵みを受けて死ぬことの始まりを告げられる、ということである。それは、神は終わりの日（終末）に、キリスト者を全く新しく作りかえるようにした<sup>75</sup>。それが、ルターのいう真の洗礼の意味である。

また、先のローゼ（2011）は、洗礼の用途について、「洗礼の目的は、われわれを死の消滅（要因）から救い出すもので、事実、洗礼の儀式はキリスト教入信の始まりとなるものである<sup>76</sup>」と述べ、その上

実行委員会編、日本聖書協会、1988年、(新) 60頁。

<sup>69</sup> 石居正巳『教会とはだれか ルターにおける教会』リトン、2005年、100頁。

<sup>70</sup> 前掲書、100頁。

<sup>71</sup> 前掲書、100頁。

<sup>72</sup> ルターは『洗礼という聖なる尊い sacrament についての説教』(Eyn Sermon von dem heyligen hochwirdigen Sacrament der Tauffe. 1519, WA 2, 727-737) (611~628頁) の中で述べている。

<sup>73</sup> D. Martin Luthers Werke. Sonderedition der Kritischen Grsamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1883 Werke, Teil I, 1. Band, Gesamtherstellung: Ebner und Spiegel GmbH, Ulm Printed in Germany, 2003, S. 727. (邦訳『ルター著作集 第1集 第1巻』石本岩根・長谷川健三郎・徳善義和・緒方純雄他訳、聖文舎、1964年、611頁)。

<sup>74</sup> Ibid., S. 727. (前掲訳書、612頁)。

<sup>75</sup> Ibid., S. 728. (前掲訳書、613頁)。

<sup>76</sup> Lohse, Bernhard. *Martin Luther's Theology, Its Historical and Systematic Development Translated and Edited by Roy A. Harrisville*. Fortress Press

で、「特に重要なことは、それまでの伝統（カトリック教義）を超え、変化させることを強調したのである。それは、洗礼によって、神の恩恵が多く与えられるだけでなく、それは、ルターの心情を反映し、保証したものである<sup>77)</sup>」と述べている。

さらに、ローゼ（2011）は「主の晩餐の教義の転換は、ルターによって継続する問題であった。われわれは、明らかに、急速な反対論に対して、慎重さを必要としていた。ルターにとって、具体的に、三位一体あるいは基本的な教会共同体の事実（知識）という根本的な教義の意義を確かなものとして、論証可能なものにする、すなわち、それらの教義の外側に現れた重要性を認識し、それらを容易に理解することができる、ということである。われわれの教義に対抗する者に対しては、ルターは慎重に対応するであろう、ということであった。ルターは（キリストのからだと血が）真に現臨するという考え方を、簡潔な理由でしかも大いに強調しながらも、それらの論争に対して主張したのである。どちらかといえば、それは、真のキリストの現臨という教義を、ルター神学として、より良く改善したものであった。そして、信仰の体験という教義上の原則は、宗教改革を進展させる深い拠り所となったのである。広範囲に繰り広げられた、ルターによる宗教改革の神学は、ツヴィングリとの主の晩餐についての論争を超えて、特に意味のあるものであった<sup>78)</sup>」と、宗教改革におけるルターの聖餐論の意義を強調しているのである。

## 5. 結論—ルターのサクラメント論から、独自の見解

以上、ルターの主張に照らし合わせると、厳密に言えば、バッハの《マタイ受難曲》それ自体は、サクラメントとはいえない。だが、ルターのいうサクラメントが神の一つのしるし、恩恵の姿、サクラメント的な外的なしるしと捉えるならば、バッハはキリスト者の肢体、手足となって《マタイ受難曲》を創作し、ピカンダーは自由詩によって参与していた。

そして《マタイ受難曲》はライブツィヒ・聖トー

マス教会の聖金曜日の晩課礼拝（午後）に於いて上演され、また主要礼拝（午前）の二種陪餐（パンとぶどう酒）では神の現臨があり、聖徒の交わりとなっている。さらに、会衆は説教と音楽のちからによってイエスの受難と十字架の意義を再確認することができた。そのことによって、会衆もバッハもより信仰を強め、それは、目に見えない神からの恩恵があったということである。また、バッハ自身は洗礼（幼児）のサクラメントを受けていて、そのしるしが刻まれている。

したがって、バッハの《マタイ受難曲》には、サクラメント的な恩恵の姿という外的なしるしの現われがあった、といえる。ルターの教えとバッハの教会音楽は、今日に於いても多くの人々に影響と感動を与えつづけている。これらが普遍的なものとなっている明らかな証拠といえるのである。

(Received: May 31, 2017)

(Issued in internet Edition: July 1, 2017)

Minneapolis, 2011, p. 78.

<sup>77)</sup> Ibid., p. 78.

<sup>78)</sup> Ibid., p. 306.